

イデアと同一性をめぐる対話〔Ⅰ〕

——Platon, *Rep.*, 597C1—D3 を端緒に——

山 川 偉 也

目 次

I 問題および *Rep.* 597C1—D3 要約

II 議論の諸前提とその解釈(1)

III 議論の諸前提とその解釈(2)

IV 第三人間論と意味論的パラドックス

——以上第12巻第2号

V イデアの離在性

VI プラトンの言語階型理論

VII パラデイグマ・イデアの同一性(1)

——以上本号

VIII パラデイグマ・イデアの同一性(2)

IX 結 語

V

アリスタゴラス なんという猛烈な論理的暴力ぶりだったことだろうね、ゼノンよ。エイロネイアスのいまの話しぶりは、それとも聞いてはいなかったのかねきみは？

ゼノン はい、よくは聞えませんでした。もっとも耳の底のところでざわざわしている物音には気づいていました。しかし聞き分けるはたらきをするのは心ですから。

アリスタゴラス いやさ、それはどういう意味だね？エイロネイアスの議論はきみの心に訴えかけるほどのものではなかったという意味かね？それとも彼の言っていることがきみには理解できなかったという意味かね？

ゼノン その御質問には「その両方です」とお答えするしかありません。私にはよく理解できませんでしたから彼の議論はおもしろくなかったのですし、また私の心に訴えかけるものを彼の議論が持ってはいませんでしたのでよく理解することもできなかったのです。

ゲンナイオス アリスタゴラス、どうか私の連れてきたその分りの悪いむっくりした仔犬のことはうっちゃって下さい。そいつはラコニア産にはめずらしくきびきびしたところのない奴で、ひとつところでもたもたして嗅ぎまわるものの、そのくせ何一つ満足にみいだすことのない奴なのですから。まったく、ゼノンという名前がお辞儀をして逃げだすのではないかと思うほど万事につけて鈍な奴なのです。

アリスタゴラス ずいぶんとひどいことを言うじゃないか、ゲンナイオス、それではあまりにこの若者がかわいそうだ。

ゲンナイオス かまいません、いっこうに、そんなことは。それよりも、私はさきほどからのエイロネイアスの議論に、すっかり腹を立てているのです。彼がプラトンを哀れな司書殿に仕立てあげたことに対してですね。

TMA の前提 1 の事件にからむごたごたとと称するものに関してきみの行

なった芳しからぬ行為はさておき、いやさ、エイロネイアス、きみははたしてほんとうにプラトンが、*F*のアイデアはそれ自体が、それを分有することによって*F*であるところのすべてのものに属する一メンバーであるという意味で、*F*である、そういうふうに信じていたと思っているのか？

エイロネイアス まさにそのとおり。そして、プラトンがそう信じていたかぎりにおいて、彼のアイデア論体系は砂上の楼閣だったのである。それともきみはプラトンが「*F*のアイデアは*F*でない」と言った証拠を挙げられますか。反対に、ぼくが先に挙げた『プロタゴラス』330C—D 以外にも重要な諸箇所において「*F*のアイデアは*F*である」という趣旨の発言はみいだされるが、「*F*のアイデアは*F*でない」という趣旨の発言はどこにもみいだされないのだ。

ゲンナイオス たしかに、エイロネイアスよ、諸対話篇には「*F*のアイデアは*F*である」という趣旨の発言があまたたびみいだされうる。よく挙げられる例としては、たとえば、「美そのものはいかなる観点から見ても美しい」(*Hipp. Maj.* 288D—289C) とか「正〔義〕は正しい」(*Prot.* 330C)とか「美そのものは、あらゆる観点から見て、あらゆる時に、比較を絶して、常に同一のものとして、誰が見ようと美しい」(*Symp.* 210E—211 B)とか「等は絶対的に等である」(*Phaed.* 74A—B) などがある。そして、さらに私は、たとえばプラトンに対して誰かが「美そのものは美しくない」などと言いでもしようものなら、プラトンは、おそらく、その者を、「美そのものは美しい」ということをその者が認めるようになるまでは、説得してやまないだろうということをも認める。^{*} いったい、美そのものが美しく、そしてわれわれの憧れをいやがうえにも喚び起すものでないとすれば、「饗宴」におけるあの《美》に向っての登高の説は、いったいどのように説明されうるというのか。プラトンのアイデア論から「*F*のアイデアは*F*である」という要素を除き去ってしまうならば、われわれ

^{*} Cf. Vlastos, "Self-Predication and Self-Participation in Plato's Later Period", *Phil. Rev.*, 78, 1969.

は、彼の思想に対していわばロボトミー〔前頭葉切除手術〕を施すことになるのだ。その結果は、たしかに現代論理学に立脚しての一面的な考え方をする人々のサークルの間にも波風立てず、円満解決をもたらことになるのかもしれないが、そのことによってしかし、彼の思想は、いわばその人格中枢を徹底的に損われることにもなるのだ。そして、この要素を喪失したプラトン哲学なるものは、実際、かつてはすばらしかったが今はすっかり魅力の失せた恋人といった、まったくもってそらぞらしいものであるにすぎないのだ。

ただし、エイロネイアスよ、私はきみの気に入るような仕方で「 F のアイデアは F である」をプラトンの真正の命題だと認めようというのではない。すなわち私はディオクレスが≪グロテスク≫だと形容したIIIを認めようというのではない。すなわち私は、「 F のアイデアは F である」といわれる場合の「 F である」を述語あるいはメンバーシップの表現であるとは解さない。

エイロネイアス では、どのように解するというのか。(i) F のアイデアはそれ自体 F であるか→ F であるか、それとも(ii) F のアイデア自体についてそれが F であるか否かを問うことは無意味であるか。これら(i), (ii)以外に F のアイデアについて問う問い方がどこにあるというのか。(i)の問いの含む選言肢の一方「 F のアイデアはそれ自体 F である」が成り立つかどうかについては目下のところ係争中であるからこれを度外視しよう。しかしもう一方の選言肢「 F のアイデアはそれ自体 F でない」は、少なくとも間接的には、**系3b**として承認済みである。そのことはプラトンがこの(i)の方式の問いを立てた可能性を高くするのである。そしてそのことはまた(ii)の方式の問いを立てなかったこと、すなわち F のアイデアはそれ自体 F であるか否かを問う問いの方式のみが整合的なものであるとプラトンが考え、(ii)の方式での問い、すなわち F のアイデアはそれ自体 F であるか否かと問うことは無意味であるとプラトンが考えたことをありそうにもないことにするのである。**TMA**においてプラトンが F のアイデアはそれ自体 F であるということを暗黙のうちに仮定していることは、たとえば彼がその仮定を許容しえないものだと感づいていたにしても、少なくとも彼にと

って(ii)の問いは考慮の外にあったのだということを確実にするのである。しかも彼が(i)の方式の問いの中で、その問のい含む二つの選言肢（それらは矛盾関係にある）のいずれも明白なかたちでは肯定することも否定することもできなかったとしても、なんら不思議ではないのだ。そしてもし万一彼が(ii)の方式をとって進み、「 F のアイデア自体について、それが F であるか否かを問うことは無意味である」と考えたとすれば、あの意味論的パラドックスのような事態は避けられただろうが、しかしそのときには、今度はきみの「 F のアイデアは F である」は寄るべき港をもたない難破船となることだろ。

ゲンナイオス よしてもらいたい、そのような有害無益な分類癖は、というのも、私のいう「 F のアイデアは F である」がきみのいましがた分類したもののなかに入らないものであることは明らかなのだから。たしかに、もしも私のいう「 F のアイデアは F である」という命題が、その「 F である」において、述語あるいはメンバーシップを意味しているとするならば、そうした意味において F であるところの F のアイデアが、みずからが F であるために自己自身以外の他の何物かからその F という相をもらわないでもっているといった事態を、アイデア論の体系内において首尾一貫して説明しうる根拠などは、たしかになにひとつとしてないことになるだろう。しかし私はそういった意味で「 F のアイデアは F である」と言おうとしているのではないのだ。きみの議論は故意に「カテゴリーの置きちがえ」をやるものにすぎない。

エイロネイアス ほほう。ではきみの「 F のアイデアは F である」とは何を意味するのですかな。おそらくは、言うに言われぬ《神秘》がはじまるのでしょうか。

ゲンナイオス 茶化すなかれ、エイロネイアス。きみの議論に歯止めをかけるのはそうむづかしいことでもなんでもないのだ。そうするためには、「……は F である」に二つの意味を体系的に区別すればよいのである。

エイロネイアス どのように？

ゲンナイオス 素朴集合論のパラドックスに逢着してラッセルのとった対応策

は、きみのすでに言及したとおり階型理論によるものであった。そしてこれまたきみの指摘したとおり **TMA** は明らかに集合論のパラドックスとパラレルな意味論的パラドックスの一種なのだ。『パルメニデス』において自身がそのようなパラドックスを見事に定式化してみせ、**TMA** がその一種である—と多に関するパラドックスについて、『ピレボス』14E—15C において「生成消滅するもののうちに一なるものをおかない場合」そのような一「すなわちアイデア」に関して起ってくるさまざまなパラドックスは「うまく同意がとりつけられないと、あらゆる行きづまりのもとになるけれども、うまく同意がなされれば、万事うまく行くことのもとになる」と発言したプラトンが、そのようなパラドックスを処理するなんらかの手段を講じなかったはずがないのだ。

そのような手段が何であったか、残念ながら今となっては、われわれはそれを直接的には確証しえない。しかしそれが、なんらか階型理論に類したものであったであろうということは十分に想像しうるのであって、すでに人も指摘したところであるが、*『パイドン』100C4—6 における

εἴ τί ἐστιν ἄλλο καλὸν πλὴν αὐτὸ τὸ καλόν, οὐδὲ δι' ἐν ἄλλο καλὸν εἶναι ἢ διότι μετέχει ἐκείνου τοῦ καλοῦ καὶ πάντα δὴ οὕτως λέγω. [訳:「美そのもの以外に、もし何か他のものが美しくあるとするならば、それは、それがあの美[そのもの]を分有しているということ以外の他のどんなことによるのでもないのである。そして、私の考えでは、万事につけてかくのごとくなっているのである」]。

などは、≪アイデアとそれを分有するものと同じ言語レベルで語ってはならない≫ということ、アイデア = 個物関係におけるプラトンの言語階型理論の第一の格率として採用してよい根拠を提供すると思われるのである。その格率によれば、二つの文

*N. Fujisawa, "'Εχειν, Μετέχειν, and Idioms of 'Paradeigmatism' in Plato's theory of Forms" *Phronesis*, Vol. XIX. no.1, 1974.

- (i) $\iota(F)$ は F である
- (ii) $\iota(F)$ を分有するすべての x は F である

における「 F である」は厳密に区別されなければならなくなる。なぜなら、(ii)にみいだされるところの「 F である」は、まさに F のアイデア以外の x 、たとえば a, b, c, \dots といった個物に対する述語を意味し、換言すれば F という相が a, b, c, \dots に内在 ($\epsilon\lambda\epsilon\sigma\tau\iota$) していること、あるいは a, b, c, \dots が F という特質ないし属性を有している ($\epsilon\chi\epsilon\iota$) ということの意味するのに対し、(i)にみいだされる「 F である」は、 F のアイデアが自身以外のアイデアを分有しているということをも、また自分自身を分有しているということをも意味しえないからである。なぜなら、いずれの場合にも、 F のアイデア以外の x について語ったのと同レベルの「 F である」を F のアイデア自身に述語づけることになるからである。では、(i)と(ii)における「 F である」が相互に根本的に異なるとされる場合、そして(ii)における「 F である」が述語を意味するとされる場合、(i)「 $\iota(F)$ は F である」は何を意味するのであろうか。私はこの問いに対して端的に、「 $\ll \iota(F)$ は F である \gg が意味するのは $\ll \iota(F)$ は……が F であることの範型因である \gg ということであって、その場合、空所 $\ll \dots \gg$ に “ $\iota(F)$ ” を代入することは許されない」ということであると答えたい。このように、(i)における「 F である」と(ii)における「 F である」とを原理的に区別するならば、われわれは **TMA** を虚偽推論として却下することができるのである。

VI

ディオクレス プラトンのために、おおゲンナイオス、きみは失地回復に努めたようだ。しかし真理のために、どうかなお私に答えて下さい。きみのいうように、 F のアイデアが、「 F のアイデアは F である」といった表現によって言い表

わされる範型アイデアである場合、その表現に含まれている「 F である」という言葉は、範型アイデアとしての F のアイデアとどのような関係にあるゆえに F という相をもつ個々のもの、すなわち F のアイデア以外の a, b, c, \dots が F であるといわれる場合の「 F である」と異なるのかを。

ゲンナイオス わかりません。あなたの御質問の趣旨が。

ディオクレス いや私の問い方が悪かったのです。私は、二つの「 F である」をあまりにも 截然と切り離し（コーリゼイン） すぎてはならぬと思ったのです。それらには別の側面（分有関係ないし 範型 = 写像関係）もあるのですから。少し話がこみ入ってきそうですから、ここで便宜上、 F のアイデアについて言われる「 F である」の含む F を $F[M]$ 、 F のアイデアを分有するものについて言われる「 F である」の含む F を $F[C]$ で表わすことにしましょう。 M や C はモデルおよびコピーを表わすものと思って下さい。また、以下では「美しい」、「白い」、「丸い」などを同様に二とおりの意味に使いわけたいと思いますので、これらについても上のやり方とパラレルに「美しい $[M]$ 」、「美しい $[C]$ 」などの用法をお許しいただければと思います。

さて、次のような場合を考えてみましょう。

- Ⅰ { 1. 美のアイデアは、美しい $[M]$. .
2. (美のアイデア以外の) a, b, c, \dots は、美しい $[C]$. .
- Ⅱ { 1. 白色標本は、白い $[M]'$.
2. (白色標本以外の) a, b, c, \dots は、白い $[C]'$.
- Ⅲ { 1. 基準円は、丸い $[M]''$.
2. (基準円以外の) a, b, c, \dots は、丸い $(C)''$.

「白色標本」とか「基準円」とかいう言葉（これらは少々奇妙なものではありますが）には問題はないものとして下さい。「白色標本」ということではそれによってものの白さが測られるところの当のものを、また「基準円」という

言葉が指示するものとしては、それによって個々の丸いものの丸さの度合が測られるところの当のものを考えて下さるとよいのです。

さて、「白い $[M]'$ 」や「丸い $[M]''$ 」は異常な述語、*self-referent* な述語でしょうか。そのように考えることは明らかに理に合わないことです。白色標本は「白いもの」の一事例ではなく、基準円もまた「丸いもの」の一事例ではないからであります。ゲンナイオス、さみははたして同意されるでしょうか。

ゲンナイオス 同意しますとも。それだけではなく、あなたの挙げられた例での「白い $[C]'$ 」や「丸い $[C]''$ 」が、それぞれに、「白いという特質(相)をもつ」および「丸いという特質(相)をもつ」と同義だということを認めたうえで、そのそれぞれが「白い $[M]'$ 」や「丸い $[M]''$ 」に置き換えられることは決してないということをも認めたいと思います。そして、そのことは、必然的に、「美しい $[C]$ 」を「美しいという特質(相)をもつ」と同義のものと認めさせるのであるが、さらにこの「美しい $[C]$ 」を $\widehat{I}-1$ の「美しい $[M]$ 」の位置に置き換えることはできないという主張にもつながっていくのです。そのような置き換えを行うことは、アイデア論にこのうえない暴力を加えることになるわけであります。

ディオクレス はい。白色標本は「白いもの」の一事例ではなく、基準円もまた「丸いもの」の一事例ではないのですから。すると、白色標本は「白い $[C]'$ 」の意味では白くなく、同様に、基準円もまた「丸い $[C]''$ 」の意味では丸くないのです。というのも、白色標本は自分以外のものの白さを測るものであり、基準円は自分以外のものの丸さを測るものだからです。^{*} では、白色標本や基準円について「白い」とか「丸い」とかと語るのはまったく無意味だと考えるべきでしょうか。私はエイロネイアスの発言を念頭において問うているのであります。彼はたしかに「 F のアイデアはそれ自体が F であるか否か」という問いに対して、プラトンが現代論理学者たちと歩調を合わせて、そうした問いはたん

^{*}拙著『人間とアイデア』（法律文化社）第二部所収論文「G. ヴラストスと第三人間論」中の議論（243—244ページ）を参照いただきたい。

に無意味だと答ええたなら **TMA** のパラドックスを回避しえたのだが、実際には、そうした問いに対して、プラトンは、**F** のアイデアはそれ自体 **F** であるか **F** でないかのいずれかでなければならぬと考え、しかもそのどちらであるとも決しえなかった、と言ったのでした。そうではなかったですか、エイロネイアス？

エイロネイアス いや、そのとおりですとも。

ディオクレス さてしかし、白色標本や基準円について「白い」とか「丸い」とかと語るのはまったく無意味だと人が言うなら、おそらくその人は嘘をついているのです。その白さを測定しえないもの、それが白色標本というものであり、その丸さを云々できないもの、それが基準円というものであるにもかかわらず、その白さや丸さを測られる諸事物との関係において、それらは「白く」また「丸く」あるからであります。すると、この場合の「白い $[M]'$ 」とか「丸い $[M]''$ 」とかいうのは、白色標本によってその白さを測られ、基準円によってその丸さを測られるものとの関係において白色標本や基準円がみずからを示す参照標準、すなわちパラダイグマとしての相でありましょう。すると、美そのもの・善そのものは、極言すれば、それらが美しい諸事物や善い諸事物のうちの一つではないという意味で、全然美しくも善くもないのであって、それらをモデルとして仰ぐところのものとの関係においてこそ恒常的に美なるもの・善なるものなのだとということになりましょう。そしてそのとき今度は逆に、それらによって美しさや善さの程度を測られるところの諸事物は、美そのもの・善そのものではないという意味で、全然美しくも善くもないということになりましょう。このことを言葉を換えて言いますと、「白い $[M]'$ 」と「白い $[C]'$ 」、 「丸い $[M]''$ 」と「丸い $[C]''$ 」、したがってまた、「美しい $[M]$ 」と「美しい $[C]$ 」とは、ゲンナイオスが言ったように、まったく階型を異にするものなのだと申せましょう。そこで、たとえば、「美のアイデアは、美しい $[C]$ 」などと語ることとは、あたかも数2について「数2は二つである」と語るような無分別を犯すことになるのです。はたしてきみは、おおゲンナイオス、いま私が申し述べた

ことをも、それがプラトンの考えであると認めるでしょうか。

ゲンナイオス おそらく、あなたのおっしゃることは、正しいのかもしれませんが。

ディオクレス では、私たちは、「 F のアイデアは $F[M]$ である」と言われる場合の「 $F[M]$ である」を、上に述べられたような意味、すなわち、そのものを分有することによって個々のものが $F[C]$ であるところの F のアイデアが、それら個々のものに対してみずからを示すパラディグマとしての相なのだと解してよろしいでしょうか。

バッケイオス 「少なくともそのひとつの意味は」と限定したほうがよいでしょう。

ディオクレス よろしい。それではそのように言い直すことにいたしましょう。では、どうだろうか、バッケイオス、人が或るものについて言及し、次いで、その或るもの以外[・]ということと言うとすれば、* それでその人は一切を言っていることにはならないでしょうか。

バッケイオス いや、そのとおりです。

ディオクレス そこで、 F のアイデアとそれ以外[・]の $F[C]$ であるすべてのものを考えてほしいのです。はたして、 F のアイデアとそれ以外[・]の $F[C]$ であるすべてのものの双方がそこにおいて一しょにあるような、それら双方に共通するなにか第三者といったものが考えられるでしょうか。

バッケイオス 少なくともひとつは、そうした第三者があると、私には思われていたのです。すなわち、両者はともに「 F である」という点において F の世界の両部分をなすのだ、とですね。

ディオクレス α と α の補クラスとが合してひとつの論議世界を形づくる。そ

*この「以外」という言葉は、プラトンが『パルメニデス』篇のいわゆる第二部において愛用したものである。たとえば、第三假定(157B~159B)および第四假定(159B~169B)における精妙な議論を想起されたい。

のように、 F のアイデアとそれ以外の F である諸事物とはひとつの F の世界をかたちづくるのだ、そのようにきみには思われていたのでしょうか。しかし、考えてみたまえ、 F のアイデアと $F[C]$ である諸事物との間に成り立つ「以外」というのがはなはだ特色のあるものなのだとすることを。それというのも、 F のアイデア以外には真に F である何物もないだけではなく、他方、 $F[C]$ であるのは F のアイデア以外のそれら諸事物以外にはないからです。

エイロネイアス すると両者はまったく異なるわけであり、異なるという仕方において似ているわけでしょうか。というのも、それらは範型と写像との関係にあったはずですから。

ディオクレス 写像であるところのものは、当然ながら、範型アイデアに似ていることになるでしょう。あるいはむしろ範型アイデアの類似物であるでしょう。しかしながら、範型アイデアがその写像に似ているわけではありません。先に利用した白色標本と基準円の例をもう一度だけとりあげてみましょう。それらは、それらによって測られるものとは階型を異にする参照標準でした。白色標本や基準円以外の a, b, c, \dots は、それら参照標準に照合られ、白さや丸さの度合を計測されることによってはじめて、「白い $[C]'$ 」とか「丸い $[C]''$ 」とか言われるのでした。そこで、もしも、それらの参照標準がないならば、それら a, b, c, \dots は一般に「白く」あることも「白く」なくあることも「丸く」あることも「丸く」なくあることもできないということになります。同様のことは美のアイデアやその他のアイデアに関しても言えることです。そして一般に、もしも F のアイデアがないならば、個々のものは F であることも F でなくあることもできないということになるでしょう。アイデアの分有($\mu\acute{\epsilon}\theta\epsilon\acute{\xi}\varsigma$)と離在($\chi\omega\rho\iota\sigma\mu\acute{o}\varsigma$)とは、同一の楯の両面ともいうべきものでありまして、おおエイロネイアスよ、きみがいまいみじくも言ったように、 F のアイデアを分有するところのものどもは(ただし写像に関してのみあてはまるのですが)、 F のアイデアと異なることにおいて F のアイデアに似ているということになるのです。

VII

アリスタゴラス どうだね，ラコニアの小犬君，今度は少し聞えただろうか。

ゼノン ≪プラトンの言語階型理論≫とかいう，なにかなじみのないものが，ちょうど舞台仕掛けの *deus ex machina* のように，アイデアの天から降りてきて，あなたのプラトンを救って下さったのですね，アリスタゴラス。

アリスタゴラス それはだな，ゼノン．なるほどディオクレスの言葉づかいは，私のような古いプラトン学徒にはなじめないものだよ．しかしだね，それもまあ，われわれが，今日この一日を多少とも刺激に充ちた言論にもまれながら，無事平穏だったことを感謝して家路につくことができることを思えば，まあ仕方のないことだと，諦めはつくんだ。

さて，みなさん，以上のみなさんの議論の結果，私たちが問題としてきたあの仮定Ⅲは，プラトンの真正の仮定ではないことが判明したわけですから，ここで *Rep. 597 C1—D3* をめぐる私たちの議論を打ち切ってもよいのではありますまいか。

ゲンナイオス よくありません．私たちは「*F*のアイデアは *F*である」といった文が内包しているかもしれない意味を，まだ充分には吟味しつくしてはおりません．そのひとつの意味は明らかになったと申してよいでしょう．そして，そのひとつの意味によっても，おそらくは，*Rep. 597 C1—D3* が無限背進論にならないことだけは主張しうるであります．しかしながら，そのひとつの意味だけでは *Rep. 597 C1—D3* の構造に立ち入った理解ができるとは申しかねます．で，私たちがまだ残しているところの「*F* [*M*]である」についての批判的検討は，おそらく≪同一性≫に関するものであると，私は思うのです．というのも，「*F*のアイデアは *F* [*M*]である」といわれるとき，その文に含まれている「*F* [*M*]である」は，述語でもメンバーシップでもなかったのでありますが，するとあと二つだけ採らるべき解釈が残っていますから．

バッケイオス そのとおり．ひとつはクラスの包摂関係として理解される「*F*

のアイデアは F である」であり、あとひとつは同一判断としての「 F のアイデアは F である」です。しかし、前者は解釈不可能。なぜなら、 F のアイデアは明らかにクラスではないからです。後者は解釈可能。しかし不毛の解釈が可能です。なぜなら、「 F のアイデアは F のアイデアである」などと言っても、なにか新しいことがはじまる見込みは全然ないのだから。

ゲンナイオス いや決して、むしろ私たちが F のアイデアに対して十分に基礎づけることができないでいるパラダイグマとしての相だと解された「 F [M] である」を、同一性としての「 F のアイデアは F である」は、実質的に、プラトンのアイデア論体系のうちに根づかせることになるでしょう。個物についてプラトンが考える場合、彼はつねにそれを、たとえば片時といえども同一にとどまらず (*οὐδέποτε ὡσαύτως ἔχει*)、絶えざる変転のうちにある (*ἄλλοτ' ἄλλως*) というふう特徴づける (たとえば *Phaed.* 78 E5, D2—3) のですが、アイデアについてはそれが自己同一であるということをくりかえしくりかえし主眼しているのでありまして、アイデアの自己同一性と唯一性とは切り離しがたい関係にあるからなのです。

さて、私はここではしかし、アイデアの自己同一性のもつ諸象面のうち、*παράδειγμα* としてのアイデアの自己同一性に焦点を求めてみたいと思います。寝椅子職人は、パラダイグマとしての寝椅子のアイデアの単一の相 (*εἶδος*) を凝視しつつ、次々に自己の作品を作りあげてゆくのであり、その見る時と所によって寝椅子のアイデアがその相を変えるといったことは決してないのであって、寝椅子のアイデアであるものはつねに同一の、そして唯一の相を示すのです。とすれば、寝椅子職人との関係においてパラダイグマとしての相をあらわす寝椅子のアイデアからその同一性を切り離して論ずることはできないと言うべきです。いやむしろ、つねに同一性を保たないようなものは、その本質においてすでにパラダイグマとしての資格をもたないものだと言わなければなりません。このように考えるならば、アイデアの自己同一性こそは、むしろアイデアのパラダイグマとしての相を基礎づけるものだと言わなければなりません。しかも、イ

デアの自己同一性ということには、その離在性が切りはなしがたく結びついて
いるのです。

私は、ただひとつ、プラトンの典型的な言葉を挙げておきましょう。それは
『ティマイオス』 51 E 以下にみいだされる 次のような言葉です：

τούτων δὲ οὕτως ἔχόντων ὁμολογητέον ἐν μὲν εἶναι τὸ κατὰ ταῦτ' αἶδος
ἔχον, ἀγέννητον καὶ ἀνώλεθρον, οὔτε εἰς ἑαυτὸ εἰσδεχόμενον ἄλλο ἄλλοθεν
οὔτε αὐτὸ εἰς ἄλλο ποι εἶν, ἀόρατον δὲ καὶ ἄλλως ἀναίσθητον, τοῦτο ὁ δὴ
νόησις εἴληχεν ἐπισκοπεῖν……

すなわち、イデアは恒常的・不生・不滅で、かつノエーシスによって把握され
るところのものであると一気に言われております。このうち、「同一の相を
保つ」(τὸ κατὰ ταῦτ' αἶδος ἔχον) ということと「他所のものから自分のとこ
ろへ他物を受け付けもせず、また自分がどこか他のものへと入ってゆきもしな
い」(οὔτε εἰς ἑαυτὸ εἰσδεχόμενον ἄλλο ἄλλοθεν οὔτε αὐτὸ εἰς ἄλλο ποι εἶν)
ということとは、イデアの存在様式のきわめて独自のあり方を示すものです。
イデアが自己同一的であることは、同時に、他のものからそれが独立自存して
あることなのです。それは他のものを分有することによって自己の同一性を保
つのもなければ、また他のものの中へと編入されることによってその独自性
を失うのでもないのです。ですから、あの二つの寝椅子は、たしかに、寝椅子
という相をもつ多くのものの中に加えられることによって唯一無二の寝椅子の
イデアを求めるといふふうにはならないでありますが、他方では、『パル
メニデス』におけるあの大のイデアは、それが大のイデアとしての自己同一性
と独立性とを保つかぎり、大なる諸事物のなかに加わり、それゆえに、みず
からが大であるためにさらにもうひとつの大のイデアを要求するということにも
ならないわけです。したがって、「同一の相」を保つものとしてのイデアに
注目するならば、『国家』の私たちの議論は無限背進論に陥らないばかりか、

TMA をも、それがアイデア論の根本思想を歪曲するものだとし、却下することができるわけであり、さて、最後に私は、私のいま述べたことを、私たちの本日の討議の成果に関連づけて要約しておきたいと思います。

Ⅰ ディオクレスは、*Rep.* 597 C1—D3 における証明が、結局のところ、“1-2⇒1-2” にすぎないということを明らかにし、もしプラトンがそこでの議論においてアイデア ϕ の唯一性の証明を意図したのであれば、その証明そのものは、“**F**” に対応する二つのアイデアは存在しないという趣旨の上の 1-2 に 1-1 を結びつけたものでなければならなかったと言ったのでした。すなわち彼は、アイデア ϕ の唯一性の証明が二段階に分れることを示唆したのでした。しかしながら、私の思うに、この 1-2 は、アイデア ϕ の自己同一性の表現だと読みとることが可能です。1-2 をもしそのように解釈するならば、『国家』のあの議論はもっとも素直に理解できます。あの議論は、「それら二つのものがそのものの相をもつことになる一つのものが現れてくるだろう」という文を含んでいました。寝椅子の二つのアイデアを仮定することは、アイデアの自己同一性というアイデア論の公理命題に矛盾するものです。ゆえにその仮定は否定され、一なる寝椅子のアイデアが回復されるのです。仮定の否定がただちに 1-2 に転化すること、このことでもってプラトンのあの議論は尽くされているのであります。二つのアイデア Σ_1, Σ_2 の感覚物への転落は、ドラマ的筋立ての要求するものにすぎません。

Ⅱ エイロネイアスの定式化した **TMA** の記号表現：

1. $\exists y (\forall x (x \in y \equiv F(x)) \rightarrow \exists \phi (\forall x ((x \in y \equiv M(x, \phi)) \wedge \phi \notin y \wedge \phi = \iota(F) \wedge \forall \psi (x \in y \equiv M(x, \psi)) \rightarrow \phi = \psi)))$,
2. $F(\iota(F))$

における 2 は否定されます、そして、あの皮肉な働きをした “ $x \in y \equiv F(x)$ ” は正当に “ $x \in y \rightarrow F(x)$ ” で置き換えられ、さらに、ディオクレスの言語階

型理論の精神が生かされるべきです。かくして I は次のように再定式化されるべきです：

$$I'. \exists y (\forall x (x \in y \rightarrow F[C](x)) \rightarrow \exists \phi (\forall x ((x \in y \rightarrow M(x, \phi)) \wedge \phi \notin y \wedge \phi =_c (F[M]) \wedge \forall \psi (x \in y \rightarrow M(x, \psi)) \rightarrow \phi = \psi)).$$

こうして、結局、 I' はアイデア論本来の主張であるアイデア ϕ の唯一性を確証するものとなるのです。

アリスタゴラス どうやら議論は一段落したようだね。では、ここいらで、今日のこのめでたい日の愛知の営みは一休みさせていただいて、席を改め、杯を挙げ、みなさん、ディオニュソスの神をば祝ぐことにしようではありませんか！

ゼノン アリスタゴラス、ぼくはお酒が呑めないんです。

ゲンナイオス あたりまえだ、子供は酒など呑んではいかん。

ゼノン ええ。ゲンナイオス、それにぼくは、いままでみなさんが論じてこられた御趣旨にしても、すべて呑みこめたというわけではないのです。

ゲンナイオス 当然だよ、ゼノン。きみには少しむつかしすぎたんだ、今日の話は。

ゼノン いったいゲンナイオス、アイデアって何なんですか？

ゲンナイオス 何だと？

ゼノン みなさんのお話を伺っておりますと、アイデアというのは、なにかもうまるで、屋上階を重ねたはるかに遠い天上に、唯一独自で単姿的な形相を保つパラダイグマとして輝いているらしいのですが、そのパラダイグマ・アイデアについて、それが自己自身と同一であると言われる場合、その自己自身との同一というのは、なかんづく、何を意味するのですか。いや、そのようなことについてはもはや問いを立ててはいけないのであって、私たちは、アイデアは

すべて自己自身と同一であるということを自明きわまる公理として承認しなければならないのでしょうか。

アリスタゴラス これはまた難儀なことを……。ひとつの波を無事にくぐりぬけたと思えば、また新手のが押し寄せてきて、われわれを際限のない議論の海原においてけぼりにするものだね。

エイロネイアス それというのも、アリスタゴラス、議論はけっして片づいてしまっていないのですから。まったく、この若者が言ったように、パラダイグマ・アイデアの同一性というのは決して疑問の余地のないことではないのでして、この問題のなかには、私見によれば、困難なことがらが幾重にも錯綜して存在すると思われるのです。

いったい、同一性ということを、一般的に考えることにして、われわれはこれによって何を理解すべきでしょうか。アリストテレス以来、同一性の命題は思考の根本法則とされてきました。その通俗の理解によれば、この命題は $A=A$ と定式化されます。この式が言っているのは A と A とが等しいということです。では、何物かと何物かの等しさということが同一性を基礎づけるのでしょうか。しかしともかく、等しいということが成り立つためには、二つのものが必要となります。おそらく、同一ということを等しさ（相等性）ということによって理解してはならないのです。すると、 $A=A$ は、相等性は言い表しえても、同一性は言い表しえないのであって、 A の自己自身との同という事態を、かえって蔽いかくすことになるのです。一般に何物かが同じものであるためには、二つのものが必要でなく一つのもので充分であって、この一つのもものが一つであるということによって、その一つのものはすでに充分それ自身と同一であるということになるでしょう。^{*} しかし、アリスタゴラス、このように理解しますと、同一性について語るということには、いったい何の意味があるでし

^{*}以上のエイロネイアスの議論の背景には、M.Heidegger, *Der Satz der Identität* : in *Identität und Differenz*, Günter Neske, S. 9~10. 1957. があるであろう。

ようか。なぜなら、同一性について語ることに辛うじて意味が認められるのは、何物かが（どのような仕方か）何物かと同一である場合にかぎるからであり、つまりは二つのものが同一である場合にかぎるからであります。この二つのものの同一ということが、いったいぜんたい、一つのものの自己自身との同一ということからどのようにして導きだされるのか、不可解だからです。というのも、同一性の範型は一つのものの自己との同一という事態のうちにあると言われたのですが、ところがいまや、その一つのものの自己自身との間に成り立つところの同一性を二つのものの場合に成り立つ範型として役立てる方途は、結局のところ、閉されていると思われるからであります*。

にもかかわらず、なおもわれわれが同一性について語ることに意味をみいだそうと固執しつづけようとするならば、その場合には、同一性とはむしろ差異性であると言わなければならないのではないのでしょうか。というのも、或るものが自己自身と同一であると語ることになおかつ意味があるのは、或るものと同一性とがともかくなんらか異なってあるかぎりにおいてであると考えられるからです。すなわち、或るものが或るもの自身であるということと或るものが或るもの自身と同一であるということとが異なったものであるかぎりにおいてではじめて、或るものの自己自身との同一について語ることに意味がある、と考えられるからです。しかしそれが異なったものであるとすれば、もはやわれわれは、同一性を或る一つのもののなかにみいださず、かえってその一つのものと異なった他のものにみいださなければならないのです。

おお愛すべきゼノンよ。君がゲンナイオスの精妙な空論にうさんくさいところがあるのを嗅ぎだした鼻は、まことにあっぱれなものだとほめてやらねばなるまい。もっとも、君は、パラダイグマ・アイデアの自己同一性ということのうちに含まれている困難がどれほど広く遠く及んでおり、その結果、アイデア論体系を根本的に蝕むものであるかということについては、とうてい予想はつかない。

*ヴィトゲンシュタインの『哲学研究』215～216の議論が念頭に置かれているであろう。

いであろうが。

ゼノン どのような困難を言っておられるのでしょうか。

エイロネイアス 知ってのとおり、プラトンは『ソピステス』において《同》のアイデアと《異》のアイデアを立て、各アイデアが自己自身とは同、自己以外のものとは異なることを基礎づけようとしている。これは最大の困難に導くものだ。

ゼノン アイデア相互の *συμπλοκή* を言っておられるのですね。

エイロネイアス そうだ。 *συμπλοκή εἰδῶν* を言っているのだ。この議論に伏在する困難たるやまったく途方もないものであり、第三人間論の比ではないと私は思われるのだ。

ゼノン もったいぶらずに、エイロネイアス、その困難が何でありプラトンの議論のどこにあるのかを、どうか教えて下さい。

エイロネイアス いや、なにもだしおしきするつもりなどは毛頭ないのだ。ただ議論を『ソピステス』篇に移すとなれば、それはそれなりにお膳立てもしなければならぬ。そのことが少しばかりおっくうでね。しかしまあ、なんとか私の言い分を明らかにするのに必要な最低限のものだけは与えてみることにしよう。

『ソピステス』全篇の目的はソピステスを捕えることに向けられている。《非有》(*τὸ μὴ ὂν*) のなかに逃げこんでなかなか把捉できないこの者を追跡するに急で「あらぬものがある」という反パルメニデスの命題を確立することに熱心なあまり、ゼノンよ、プラトン（この対話篇で彼は「エレアから来た客人」の姿をかりて発言しているがね）は、どうもソピステス以上の詭弁に訴えざるを得なかったように、ぼくには思われる。

ゼノン どうしてですか？

エイロネイアス みたまえ、その詭弁ぶりはただちに明らかになるのだ。この対話篇の 254B~259D においては、類(*γένος*)ないし形相(*εἶδος*)ないしアイデア(*ἰδέα*)相互間の結合および非結合が《有》、《動》、《静》、《同》、

《異》という五つの最も重要な類 (*μέγιστα γένη*) を範例として調べられ、結局、「あらぬものがある」という命題が可能であることが確証される。しかし、この議論の出発点になるのは《動》と《静》という相互に正反対で混じり合うことのない類およびこれら両者と混じり合うことのできる《有》の三者である。この三者に加えて今や《同》と《異》とが導入されることとなり、それとともにイデア論にとってのこのうえない災厄と裏あわせとなったプラトンの詭弁がはじまるわけだ。《有》と《動》と《静》の三者について、エレアからの客人はこういつている。

250 A 8—9. *Εἶεν δὴ, κίνησιν καὶ στάσιν ἄρ' οὐκ ἐναντιώτατα λέγεις ἀλλήλοισι;* / 254 D 7—8. *Καὶ μὴν τῷ γε δύο φάμεν αὐτοῖν ἀμείκτω πρὸς ἀλλήλῳ.*

250 D 10. *Τὸ δέ γε ὃν μεικτὸν ἀμφοῖν ἐστὸν γὰρ ἄμφω που. : EE. Οὐκοῦν αὐτῶν ἕκαστον τοῖς μὲν δυοῖν ἑτερόν ἐστιν, αὐτὸ δ' ἑαυτῷ ταῦτόν* (そこで、それらの各々は他の二つのものとは異なるが、自己自身とは同じである)。そして対話の相手方をつとめる若者テアイテトスはこれを肯定している。さて、ゼノンよ、テアイテトスの答えははたして誤りのないものであったと、君には思えるかね？

ゼノン 他にどのような答えがありえたでしょう？

エイロネイアス 《有》と《動》と《静》の三者が相互に異なること、そして自己自身とは同一であること、これらのことからエレアの客人はものをひねりだし、あたかも手品師が空虚な帽子の中からウサギをつかみだすように、三つの類ないしイデアからさらに二つの類ないしイデアを把みだすことになるのだが、それでよいのかと聞いているのだ。

ゼノン あなたはプラトンのいう類ないしイデアをものとお考えなすのか、エイロネイアス？

エイロネイアス そう、非常に怪しげな普遍者というものと考えている。だが若者よ、君は率直に答えたまえ、《動》が《静》と異なるということから、たとえばエレアからの客人が《動》も《静》も《異》とは異なるものであると論

ずるに至るとき、はたして君は、このエレアからの客人の議論を詭弁であると思わないかね？

ゼノン おそらく、その客人はあなたが理解なさっているような意味でその発言をしたのではないと、ぼくには思われます。

エイロネイアス よいとも、君は問答相手としてはまことに御しにくい男だ。その若さでそのように分りが鈍いとはみあげたものだ。だが、いまに嫌でもプラトンの詭弁ぶりが君にも得心できよう。そして、ことのついでに、《動》や《静》や《有》は《同》を分有することによって自己自身と同であり、《異》を分有することによって相互に異なるといったプラトンの物の言い方をも認められるものとしておこう。しかし、次のようなエレアからの客人の発言に注目してもらいたい。

EE. Καὶ διὰ πάντων γε αὐτὴν αὐτῶν φήσομεν εἶναι διεκκληθυῖαν· ἐν ἑκαστῷ γὰρ ἑτερον εἶναι τῶν ἄλλων οὐ διὰ τὴν αὐτοῦ φύσιν, ἀλλὰ διὰ τὸ μετέχειν τῆς ἰδέας τῆς θατέρου.

すなわち《異》は（自身以外の）μέγιστα γένη のすべてに行きわたっており、それら μέγιστα γένη のひとつひとつは、自分の本性によってではなく、《異》のイデアを分有することによって、他のものと異なっている、というのである。《異》のイデアは、それ自体ひとつの μέγιστα γένη でありつつ、それを分有するところの《有》、《同》、《動》、《静》のそれぞれをそれぞれに対して異化するというのだ。わかるかね、ゼノン、このエレアからの客人の言葉に含まれている困難がいかに大きくまた波及するところも多いものであるかが。というのも、われわれが、「では、《異》はそれら（《異》以外の）イデアと異なるのか異ならないのか」と問うならば、ただちに、最初の困難が次のように現れてくるからだ。《異》が《異》以外のどれかひとつの類ないし形相ないしイデアと異ならないということとはありえないことだ。そのことは、エ

レアからの客人もまたやや奇妙なやり方で論証しているのだが、もしそのようなことが万一ありえたなら、たとえばそのひとつの場合として、《動》は《静》に対して《異》を分有することにより《静》と同一のものであるといったことが起りうることになるだろう。したがって、一般的に、《異》は自分以外のどの類とも異なるのでなければならない。《異》が《異》の本性、すなわちそれを分有するところのものを異化するという本性を発揮しうるためには、《異》はなによりもまず《異》以外のものとは異なるのでなければならない。《異》の本性的自己同一性は、《同》のアイデアを分有するだけでは十分ではないのであって、それに加えて、《同》のアイデアをも含めての他のアイデアとの異なりをも必要とするのだと言わなければならない。では、他のものからの自身の異なりを《異》はどこから得たのか。「《異》は《有》とは異なる」と言われる場合、われわれは、《異》のもつその異なりをどう解すべきなのか。《異》自身が自分の異化作用の支配下にあるということか。その場合には、《異》の自己分有という事態をわれわれは覚悟しなければなるまい。これは新たな第三人間であろう。それとも、われわれは、異なりということには二種あって、《異》の異なりと《異》以外のものが《異》を分有することによって異なる異なりとは異なるものであって、誰かさんの好きな言語階型理論により「異なり[M]」と「異なり[C]」の区別といったものを導入しなければならないとすべきであるのか。もっとも、今の場合には、舞台は聖なるアイデア界に終始しているらしいから、感覚界の卑しい[C]は無関係としなければなるまい。そこで、[M]なるものにも階型を設けて、原-原型たる[M⁰]とたとえば一階下の[M¹]といった区別をつけることにより、「異なり[M⁰]」と「異なり[M¹]」といった区別を導入しなければならないとすべきであるのか。しかしその場合には、「あらぬものがある」ことを証明するという父殺しに類いする暴挙を敢行するものだ（やや悲壮ぶって）自画自讃したプラトンの仕事というのは、まったく気の抜けた茶番劇にすぎないことが明々白々となるだろう。なぜなら、プラトンの掲げたかの命題たるや、実際、いま導入されたばかりの新たな武器を使って

表現すれば、「異なり $[M^1]$ 」によってこそ証明されるのであるが、しかるにその「異なり $[M^1]$ 」は「異なり $[M^0]$ 」が存立しないかぎり、（すでに明白なことと思われるが）そのはたらきをなさないのである。こうして、ラコニアの仔犬よ、「あらぬものがある」ことを証明しようとする『ソピステス』篇でのプラトンのたいへん意気こんだ存在論的企ては、残念なことに、無惨な失敗にすぎないのである。この哲学者は、あらぬもの（ $\langle\text{有}\rangle$ とは異なるもの $=\langle\text{有}\rangle$ に対して $\langle\text{異}\rangle$ のアイデアを分有するもの）がある（ $=\langle\text{有}\rangle$ を分有している）ということを証明しようとしてあらぬもの（ $=\langle\text{異}\rangle$ のアイデア）があるもの（ $=\langle\text{有}\rangle$ および $\langle\text{有}\rangle$ を分有するもの）であらぬ（ $=$ 「異なる $[M^0]$ 」）ということを前提するのだ。どうしてこれが詭弁でないと言えよう、鼻のかわいた仔犬よ。しかも自分の構築したものがさも乗り越えがたい記念碑的価値をもつものであることを誇るかのごとく、この自分の考え方の正当さに不信をいだく者は、その者自身でもっとすぐれた説明を試みるがよいと言いつたのである。^{*}このことは、ゼノンよ、プラトン自身がみずからの詭弁に気づいてさえいないという最も救いがたい判断をわれわれに強要するものではないかね？

ゼノン あなたのおたずねにいますぐお答えすることはできません。

エイロネイアス 分っているさ、君からの色よい返事はないだろうということではね。だがゼノン、君にとっていましがたのぼくの解釈がどのように疑わしく思われているのであれ、プラトンが *μέγιστα γένη* について実際にどのような分析を行なっているかをつぶさに追跡するならば、それが児戯に類した言葉の遊び、種も仕掛けもあまりにみえすいた一種の手品にすぎないことが分ってくるだろうよ。そして、ぼくの解釈が正当だということを嫌でも認めざるをえなくなるだろうよ。

さて、255E—257C では類相互間の *κοινωνία* がどのようにあるかを説明すべく、まずさしあたって $\langle\text{動}\rangle$ について、それが他のものとどのような結びつきを有するかが、次のように例示される。

^{*}259Cへの言及である。

- I { 《動》は《静》と異なる。ゆえに、《動》は《静》ではない。
 《動》は《有》の分有により、ある。
- II { 《動》は《同》と異なる。ゆえに、《動》は《同》ではない。
 《動》は《同》の分有により、（自己自身に同で）ある。
- III { 《動》は《異》と異なる。ゆえに、《動》は《異》ではない。
 《動》は《異》の分有により、（自己以外のものとは異なって）ある。
- IV { 《動》は《有》と異なる。ゆえに、《動》は《有》ではない。
 《動》は《有》の分有により、ある。

この《動》を中心とした例示において、その異様さにおいて特に目立つのはⅢである。ここの議論はこうだ： *ΞΕ. Λέγωμεν δὴ πάλιν ἡ κίνησις ἐστὶν ἕτερον τοῦ ἑτέρου, καθάπερ ταύτου τε ἦν ἄλλο καὶ τῆς στάσεως; ΘΕΑΙ. Ἀναγκαῖον. ΞΕ. Οὐχ ἕτερον ἄρ' ἐστὶ πῃ καὶ ἕτερον κατὰ τὸν νῦν δὴ λόγον* (下線部訳：〈動〉は、それがちょうど〈同〉と〈静〉とは異なるものであったように、〈異〉と異なるものであるのか。—必然です—すると、それはなんらか異なるものであらぬとともに異なるものであるのだ。)

もし《動》が《異》と異なるとすれば、《静》や《同》について言われたのと同じ理由により（*κατὰ τὸν νῦν δὴ λόγον*）。《動》が《異》でないと言われうる。しかし、《動》が《異》と異なるということは果してすでに確立済みのことであるか。否、断じてそうではない。《動》と《異》との異なりを、《動》の《静》や《同》との異なりと同じレベルで扱うことはできないのである。なぜなら、《動》の《静》や《同》との異なりについては、《動》が《静》や《同》に対して《異》を分有するからという理由が挙げられうるが、《動》の《異》との異なりについては、《動》が《異》に対して《異》を分有するからという理由をおそらくわれわれは挙げえないと思われるからである。

ゲンナイオス 《動》が《異》と異なる類だということは、すでに 255A—E

において証明されているではないか。その証明というのは、

$$\langle\text{動}\rangle = \langle\text{異}\rangle$$

$$\langle\text{静}\rangle = \langle\text{異}\rangle$$

$$\langle\text{動}\rangle = \langle\text{同}\rangle$$

$$\langle\text{静}\rangle = \langle\text{同}\rangle$$

のどの仮定も成り立たないというものであって、帰謬法を用いて、仮りに、それらが成り立つとし、その場合に、 $\langle\text{動}\rangle$ と $\langle\text{静}\rangle$ がなんらかの共通な性質 X をもつとするならば、そうした事態は

$$M(\langle\text{動}\rangle, \langle X \rangle) \rightarrow X(\langle\text{動}\rangle)$$

$$M(\langle\text{静}\rangle, \langle X \rangle) \rightarrow X(\langle\text{静}\rangle)$$

によって表現されることになるであろうが、いまこの $\langle X \rangle$ (X のアイデア) にそれぞれ $\langle\text{動}\rangle$ と $\langle\text{静}\rangle$ を仮定により代入すれば

$$M(\langle\text{動}\rangle, \langle\text{静}\rangle) \rightarrow \text{静}(\langle\text{動}\rangle)$$

$$M(\langle\text{静}\rangle, \langle\text{動}\rangle) \rightarrow \text{動}(\langle\text{静}\rangle)$$

といった結果が得られ、「 $\langle\text{動}\rangle$ は静止することになるだろし、他方、 $\langle\text{静}\rangle$ が動くことになるだろう」。これは不条理である。ゆえに仮定のいずれもが成り立たないというものであったのだ、忘れたのかね、エイロネイアス？

エイロネイアス よくぞ思い出させてくれたゲンナイオス。君の友情には感謝しなければなるまい。だがそれとともに、いまの君の発言は君の無分別ぶりを明らかにしてくれたのだ。というのも、なるほどたしかに、255A—Eにおいて $\langle\text{動}\rangle$ が $\langle\text{異}\rangle$ でないということは証明されてはいる。しかしこの証明

は、そもそも、すでに前提されていた類《有》、《動》、《静》のそれぞれが相互に異なる根拠としての《異》がなければならないことの証明であったのだ。すなわち、《動》＝《異》であるという仮定は成り立たない（そして、《静》＝《異》、《有》＝《異》という仮定も成り立たない）ゆえに、《異》の本性を第五番目のものとして認めなければならない、というかたちでの証明であったわけだ。くどいようだが、この点をもう少し確認しておこう。《同》と《異》が類として承認される以前と以後とを、われわれは混同してはならないのだ。《同》と《異》が第四および第五の類として承認される前の段階において、《有》、《動》、《静》の各々は自己自身とは同一であるが他のものとは異なるものであることが証明なしに事実として確認された。やがて、この事実によりロゴスが与えられ、《同》および《異》が類として正式に承認された。そしていまや、《有》、《動》、《静》の各々は、自己自身との関係において《同》を分有することによって自己自身に同であり、他のものとの関係において《異》を分有することにより自己以外のものとは異なるということが確認されたのである。しかし、ゲンナイオス、《有》、《動》、《静》と《異》との間の異なりは、その証明以後においては確認されてはいないのだ。

ゲンナイオス それは、たしかにそうかもしれない。

エイロネイアス すると、「《動》は、それがちょうど《同》や《静》などと異なるものであったように」というエレアからの客人の言葉は何を意味するのか。《動》が《異》との関係において、なんらか《異》を分有することにおいて、異なるのだと理解するほかないではないか。

ゲンナイオス 《異》の本性は……

エイロネイアス いやゲンナイオス、先に進む前に君の発言のなかでぜひとも確認しておきたいことがあるのだ。

ゲンナイオス 何かね？

エイロネイアス 君は先ほどの発言のなかで、「《動》が《X》を分有する」とか「《静》が《X》を分有する」をそれぞれ

$M(\langle\langle\text{動}\rangle\rangle, \langle\langle X\rangle\rangle)$

$M(\langle\langle\text{静}\rangle\rangle, \langle\langle X\rangle\rangle)$

と表現したね？

ゲンナイオス たしかに。

エイロネイアス すると君はディオクレスが定式化したアイデア論についての公理論的理解が、この『ソピステス』篇についてもあてはまると考えているのだね？

ゲンナイオス 私は、『パイドン』や『国家』のアイデア論が『ソピステス』篇においてまったく異質なものとなってしまったとは考えないのだ。

エイロネイアス では、μέθεξις (分有) 概念についてはどうかね、これもまた、たとえば『国家』とはおおはばに違ってはいないのだね、君の理解によれば？

ゲンナイオス たしかに、『ソピステス』においては、アイデアとアイデアとの分有関係が論じられる。この点では、『ソピステス』は『パイドン』や『国家』や『パルメニデス』とは異なると言わなければならない。しかし、『ソピステス』での συμπλοκή εἰδῶν は、それらの対話篇において多かれ少かれ予想されていたものだ。

エイロネイアス では、『ソピステス』での μέθεξις は、多かれ少かれ、それらの対話篇でのそれによって包括されうると君は考えるわけだね？

ゲンナイオス そう、もちろん必要な拡張はしなければなるまいがね。

エイロネイアス ともかく、君は“ $M(x, \phi)$ ”といった型がいまなお有効であり、その型が含む“ x ”の位置にアイデアを代置したものが『ソピステス』において通用するというのだね？したがってまた、たとえば“ $M(\phi, \psi)$ ”といった型がこの対話篇において有効だと考えるわけだね？

ゲンナイオス それでさしつかえないと思う。ただし、私は、「 ϕ_1 が ϕ_2 に対して ϕ_3 を分有する」といった型については、記法上のなんらか新たな工夫が必

要であり、これについてはたとえば

$$M\left[\left(\begin{smallmatrix}\phi_1 \\ \phi_2\end{smallmatrix}\right), \phi_3\right]$$

とでも表現すればよいと考えている。しかしこのような型が必要となるのは、さしあたっては、《異》および《同》の場合だけであって、そこでたとえば、「 ϕ_1 は ϕ_2 に対して、《異》を分有することにより、異なる」は

$$\forall \phi_1 \forall \phi_2 \left\{ M\left[\left(\begin{smallmatrix}\phi_1 \\ \phi_2\end{smallmatrix}\right), \langle\text{異}\rangle\right] \rightarrow \phi_1 \neq \phi_2 \right\}$$

として、また、「 ϕ_1 は自己自身に対して、《同》を分有することにより、同一である」は

$$\forall \phi_1 \left\{ M\left[\left(\begin{smallmatrix}\phi_1 \\ \phi_1\end{smallmatrix}\right), \langle\text{同}\rangle\right] \rightarrow \phi_1 = \phi_1 \right\}$$

として記号化すればよい、と思う。

エイロネイアス ふむ。……君には分っていないのだね。そのような無分別がどのような結果をもたらすことになるだろうかが。さて、それはそれとして、ゲンナイオス、君は、ディオクレスの定式化した公理Ⅱ-2の有効性を未だに信じているだろうね？

ゲンナイオス もちろんだとも。

エイロネイアス すると、その公理Ⅱ-2は、さだめし、“ $M(x, \phi)$ ”という型が“ $M(\phi, \psi)$ ”という型に拡張されたのに相応じて、

$$\forall \phi \forall \psi [M(\phi, \psi) \rightarrow \phi \neq \psi]$$

というかたちに表現し直されることだろうね？

ゲンナイオス そういうことになる。

エイロネイアス 実際、その公理がこの『ソピステス』においても妥当であるらしいのは、259A5—B1において、エレアからの客人が要約的に： $\tau\acute{o}\ \tau\epsilon\ \delta\upsilon\upsilon\ \kappa\alpha\iota\ \theta\acute{\alpha}\tau\epsilon\rho\omicron\nu\ \delta\iota\acute{\alpha}\ \pi\acute{\alpha}\nu\tau\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \delta'\ \acute{\alpha}\lambda\lambda\acute{\eta}\lambda\omega\nu\ \delta\iota\epsilon\lambda\eta\lambda\upsilon\theta\acute{o}\tau\epsilon\ \tau\acute{o}\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \acute{\epsilon}\tau\epsilon\rho\omicron\nu\ \mu\epsilon\tau\alpha\sigma\chi\acute{o}\nu\ \tau\omicron\upsilon\ \delta\upsilon\tau\omicron\varsigma\ \acute{\epsilon}\sigma\tau\iota\ \mu\acute{\epsilon}\nu\ \delta\iota\acute{\alpha}\ \tau\alpha\upsilon\tau\eta\nu\ \tau\eta\nu\ \mu\acute{\epsilon}\theta\epsilon\acute{\xi}\iota\nu,\ \underline{\text{οὐ μὴν ἐκεῖνό γε οὐ μετέσχευ ἀλλ' ἑτερον, ἑτερον δὲ τοῦ ὄντος ὃν ἔστι σαφέστατα ἐξ ἀνάγκης εἶναι μὴ ὄν}}$ (《有》と《異》はすべてのものを貫き、また相互に貫きあってゆきわたっており、《異》は、《有》に与かることにより、まさにその分有のゆえにあるのだが、それが分有するところのかのものであるので

はな^く異^なった^もの^なのであ^って、しか^るに《有》と異なるものであるからには、必然的に、それが非有であることはこのうえなく明らかなことである）と発言していることからとも言えるわけだ。

ゲンナイオス そのとおりだとも。

エイロネイアス すると、どういうことになるのだろう、《異》が自己自身との関係において《同》を分有するならば、《異》は《異》自身ですらないのであって、その結果、《異》が自己自身に対して《同》を分有するということなことは、これはもう必然的に、あ^ってはならないということになるのかね？

ゲンナイオス いったい君は何を言っているのかね？

エイロネイアス しらばくれるのはよしてもらいたい、分っているくせに。なぜなら、《異》が自己自身との関係において同であるということは、君にしても認めざるをえないのだから。

ゲンナイオス それはもちろんそのとおりだ。

エイロネイアス では、そのことは先ほどの君が拡張した分有の型によれば

$$M\left[\left(\begin{matrix} \langle \text{異} \rangle \\ \langle \text{異} \rangle \end{matrix}\right), \langle \text{同} \rangle\right] \rightarrow \langle \text{異} \rangle = \langle \text{異} \rangle$$

と表現できるはずだ。

ゲンナイオス そのとおり。

エイロネイアス しかるに、《異》が《同》を分有するならば、《異》は《同》ではない。

ゲンナイオス うむ。

エイロネイアス 《同》でないならば、異なるものであろう。

ゲンナイオス うむ、《同》とは異なるのだ。

エイロネイアス すべて異なるものは《異》を分有することによって異なるのだ。

ゲンナイオス うむ、ただし《異》以外は、と条件つきでね。

エイロネイアス 《同》を分有することによって、異なったことに注目しよう。それゆえ、《同》は《異》とその機能のうえで異ならないのだ。ゆえ

アイデアと同一性をめぐる対話〔Ⅱ〕

に、 $\langle\langle\text{同}\rangle\rangle$ は $\langle\langle\text{異}\rangle\rangle$ である。そこで、 $\langle\langle\text{同}\rangle\rangle = \langle\langle\text{異}\rangle\rangle$ であるならば

$$M\left[\left(\begin{array}{c} \langle\langle\text{異}\rangle\rangle \\ \langle\langle\text{異}\rangle\rangle \end{array}\right), \langle\langle\text{同}\rangle\rangle\right] \rightarrow \langle\langle\text{異}\rangle\rangle \neq \langle\langle\text{異}\rangle\rangle$$

であり、また同じ必然性によって

$$M\left[\left(\begin{array}{c} \langle\langle\text{同}\rangle\rangle \\ \langle\langle\text{同}\rangle\rangle \end{array}\right), \langle\langle\text{異}\rangle\rangle\right] \rightarrow \langle\langle\text{同}\rangle\rangle \neq \langle\langle\text{同}\rangle\rangle$$

である。

ゲンナイオス 君のふまじめさにはがまんがならん。

エイロネイアス 責めるならプラトンを責めたまえ。というのも彼自身が、このような言葉の遊びを遊び、 $\langle\langle\text{異}\rangle\rangle$ を異ならしめるとともに異ならしめないからだ。だが、プラトンは本気でこの遊びを遊び、アイデアの自己分有を遊んでいるのだ。

(未 完)